

文苑

海峽の秋

布 峯 生

“Poor wounded name! My bosom as a bed shall lodge thee.” — Shakspeare.

【一】

病氣保養の爲め、一年休學と事決つて、熊本を出發したのが朝の八時十分。瀛車の旅は速いもの其の日もまだ暮れやらぬ午后の三時半といふに、早くも九州は北の端れ門司港に到着、これより今夕六時出帆の豊後行小蒸汽に搭つたら、明日の旦は早く、故郷の山が見られるのであるが。此處からは程遠からぬ田の浦には、今秋大學に入る筈であつた、同窓の友富田武夫が、矢張病氣で、休學保養して居るので、最う暫らく會はなかつたし、其れに急ぐ旅ではなし、誠に宜い序であるから、これは何でも、一番訪問して遣らう。元來同境遇、同運命を嘆ずる吾等、親しく臂を把つて今昔を語らひ、若し機宜よく、東天の白らむを覺ゆる底の愉快をやらかしたなら、此も相互に、一種の保養を爲るのである、と不意に思ひついては即坐に決し、先づ海岸通りの一通運會社を探ねて、靴三個は大分港に先着けとし。これで後に残るのが、肩鞆一個に、洋杖一本、洋服に靴穿きの身輕るさは、殊更高値の腕車を雇ふでもなく、本町通りを東へ上つて、三井銀行門司支店の門を右へ折れ、爪尖が少し仰ぐと思ふと、此處は砲臺の据つて居る城山の裏側。小さい峠を一つ越すと、火事場看

たやうな門司の市街は、最う見ぬない。咽々ばかりの煤煙と、騒々しい流笛の聲が、何の事はない。他處の世界のものとなつて、前は靜かな壇の浦の海、空がどんより曇つて、空氣が一體に濃く爲つて居るので、長防の山々重くるしく、而かも直ちに手に觸れんばかり近く看ぬ。間を流るゝ瀬戸の潮、色むしる黒く見ゆるまで青すんで居るが。唯一つ前田の燈臺ばかり、夕暉が雲の斷間から射するのであらう、驚く計り紅く光つて居る。

瀬戸の内海うちうみは此處から始るので。

「二」

日頃入船千艘、出船千艘といふ非常たかいした關門海峡の口ではあるが。今は出入る船舶の影も、夕暮れの空と共に淋しく今し方、明神ヶ鼻を迂回つて、出て來た上リ流船、黙つて煙を吐いて、東の方へ往つて了うと、跡には三本橋の大和船が一隻、動くが如く、動かぬが如く干満島の沖合に懸つて居るのと、唯だ小さい一本橋の帆船が、時々一隻二隻と、關門の方へ去り、關門の方から出て來たるばかりである。

自分は今日殆んど一日、面白くもない流車の内に滞つて居て、頼まれもせぬ乗客降客の送迎に頭痛を病んで居たが。辛つと降車すると、其處は門司市街の雜沓狼籍。人は奔り、犬は吠ゆる車は飛び、流笛は鳴るといふ騒にはどくも氣も心も勞れ果て了つたのであるが。今此處に來と、るやれ嬉しや、海も山も親切顔に、自分を慰めて呉れる静けさ、穩かさ。宛然ら自分は故國こくにに歸りて、慈母の温かい懷に抱かれて居る思ひ。暫らくはム麼しても、此處を立去る氣にならなかつた。

三四艘、磯近くに錨を降るされて居る漁舟が、寄するとも見ぬ漣波のまにまに、右に左にかぶる

を振つて居る、波打際に腰うち降るしながら。時々現はれては消ゆ、消ゆてはまた現はるゝ白い帆影を送迎したり。對岸の火の山の絶巔に、例の大砲が二挺づつ并べられて、沖の方へ口を開いて居るのを一々算へて見たり。電信線が繁く長く架け連ねられて居る、向ひの海岸通りに、腕車が静かに轉るげて來るのを眺めたり。殆んど何を思ふともなく、昵と這の静寂な、山海の眺望を娛んで居たが。如何した機會やら、偶然側を振り返へると、自分の右手に一間ばかり離れて、一人の乞兒の、飄然突立つて居るのを認めた。——何時の間に來たのだらう、聲音も何も爲なかつた様だが。

「三」

年齢は十五六、ひよろりつとした瘦形である。併し此は元來天質で、まさか食物の足らぬ爲めでもあるまい。服装は此の社會にお定り通り、まだ餘り寒むからぬ今日此頃、既に少からず龜裂切れがして、眞ッ黒な脚が素足で。衣類が例のぼろ／＼ではあるが、感心にも裕を着て居る。加之締め居る帯が、誰が慈善の餘慶にや、まだ大分生命の續きさうな紺の兵子帯、これは誰が看ても、乞兒風情には不相應な品で、心の廻工合のわるい人間共は、必然盗んだ物どしか思ふまい。頭髮は随分亂暴に亂れて居るが、襟の處だけは、殊勝にも苧り取らてゐる、持物としては別にない、双手を力無げにだらりつと垂らして、一途に沖の方を凝視めて居る顔が、横から覗くのではあるが、愚然した裡にも、何處にか凄い様な、眞摯くさつた點がほの見ゆる。眉の間が狭くて、鼻が小高く、それ口元が一文字に引締つて居るで、斯様な相をあらはすのであらう。色は日に焼けて、黒ずんで居るが、耳朶の下から、頸の胸につづく處などには本地の白いのが認めらるゝ。

自分分は少時の間、眼も離さず其姿を凝視つて居たが。渠は奇形にも、此方には少しの頓着もな

く、只昵と海上を瞳視めた儘で一寸の身動きも爲ないのである。

實に可笑しな奴だ！。

自分は少しく妙に感じて来た、——全体渠は何を視て居るのだらう。また何をかんがへて居るのだらう？。

沖には以前の三本橋の和船が一隻、なほ殘つて居るのみで、今は通つて居る小帆船の影だに見えない。對岸の赤い瓦屋から、白い煙が面白氣に立ち昇つて居るが、其れを視て居る様でもなし。全体渠は何を視て居るのだらう？。

『四』

今、——と關門の方で、小蒸氣の笛が極く幽かに聞ゆる、併し渠はまんぢりども爲ない。——今干満島の向うから、帆船の小さい奴が一隻見えて来る、併し彼は動かない。——今磯に繋つて居た漁舟の綱を曳いて、其一艘に漁夫が一人乗移つた。然し渠は顧眄かうども爲ない。——漁夫は其舟を漕ぎ出す、然し渠は動かない。——今自分等の前を通つて、疑懸な容貌で、自分等を眺めながら漕いで行く。然し彼は全く知らず顔だ。——漁夫は次第に海峽の方へ近づくと、然し渠は動かない。——漁舟は小さくくつなつて、遂に明神ヶ鼻に消えて了つた、渠はまだ動かうども爲ない。實に動かないのみか、瞬さへ爲ない様である、呼吸は爲て居るのであらうか、立ちながら死んで居るのではあるまいか、——眼は潮然開いて居る。實に么麼も可笑しな奴だ！。一体何時から此處に立つてゐたのだらう？。

自分は今、海上の美觀は我不關焉といふ風で、只管此奇怪な乞兒の爲めに、心を奪はれて了つた。

。ドも怪しかる奴だ！。元來何物にでも凝り易いのが、自分の性質で、今は只夢中に爲つて渠を凝視する、其は他處から、見たら、定めて間抜けの絶頂であつたらう！、而して自分に視られてゐる渠乞兒は、また腑抜けの様になつて、夢中に沖の方を熟視してゐる。——如何に面白い滑稽畫の標本であつたらう、吾等二人の此瞬間の狀態は！。

『五』

然し依然として動かないのは渠だ、——實に只地から抜け出た、枯木か何ぞの様に、——或は又有意げに、自分に向つて氣根競べを挑んで居るかのやうにも想はるゝ。

自分は結局、氣根負けをしてつた。忌々しい野郎だ！。

自分は唐突手巾もて、鼻から口の周圍をぐるり一拭ひ、それから衣囊の燐寸取出して、巻煙草に火を点け、深く吸ひ込んでブーッと吹き出すと、忽ち白い煙が渦の如く、くるくると捲かつて、未は吹くとも見ぬ濱風のまに、長く帯の如く爲つて、斜めに乞兒の顔を掠めた。渠はよろ／＼と二歩三步巡逡する、途端に初めて自分の方を顧みめた。——あ、實に初めて動いた、初めて生け抜きの枯木が、活きた人間と爲つたのである！。

自分は覺えず微笑まざるを得なかつた、然しこの微笑は、直ぐ消えて了まつた。渠がぢろり自分を眺めた其面貌には、一種自分をして身震ひさせる、或者の影を宿してゐたので。——懼れた様な、悲しいやうな、然かも輕蔑したらしい、何さなく昂振つた顔色を見た時、自分は今乞兒の唯の一少年に對してゐると云ふ感念を、全く没却してつた。没却すると、自分が以前に無遠慮に煙を吹たことが、何だか、一種の罪でも冒したらしく思はれ、急に耻ぢかむと共に、頭が誰に下ぐるとも

なぐさな垂るゝ……………。

倏ち。はた／＼と音がしたので、頭を擧げて見ると、渠乞兒は自分の心を察したか、ム麼だが、濱傳ひ田の浦の方へ、一目散、飛んで往つて了つた。

自分は其後影が一二町の間見れて、遂に避病院の建物の蔭に隠れ去る迄、茫然見送つて居た、折から呻めくやうな漁船の鉄笛が、適か東方に響いて、海峽の山々が共鳴を興したので、初めて永い夢から覺まされた様な氣かした。見わたすと、朧氣ぼろけと霞んだ部崎べさきの燈臺下を、今一隻の大漁船が、盛んに煙を吐いて下つて來て居る。

あゝ最う暮るゝのだ！。

田の浦には炊煙が夥しく立昇つた居る。小野田の石灰焼く煙突の烟が、殆んど見えないまでに霞んで了つた。何時だらう？、時計を引張り出して視ると、五時を過ぐる十五分、長い狂言を遣つて居たものだ、人の宅を尋ねるのに、餘り晚くなつても却て無禮だ。

立ち上る途端、藍の様であつた海面が、急に朱でも流した様に、たら／＼と紅らんで來る。振返つて見ると、火の玉——實に熱火の玉のやうな落日が、惡魔の形相した、黒い畏ろしい叢雲を押分けて、今阿彌陀寺畔の山に沈まうと爲てゐる。

颯つと吹く汐風が、一際骨にこたゆる。

〔六〕

這の夕、田の浦なる富田武夫の宅では、意外の珍客を迎へたと云ふので、非常な歡待である。日頃は家内三人で、寧ろ極めて淋しい方であるのが唯一人の客が見れたといふので、急に斯も賑やか

になるものか。珍客とは抑も誰？、取りも直さず斯く云ふ自分である。

「如何も田舎で、話相手は無し。實は少からず無聊に苦んでゐたのだが、宜く訪ねて呉れたね。」と言ふ友の後から。

「眞個に宜うお訪ね下さいましたね。武夫も大變淋しがつてゐたのですよ。誰様かお友達の方が、見ゆれば可い、見ゆれば可いつてね。いやもう田舎で、一向御構は出来ませんが切望御ゆつくり、御逗留あそばせ。」と親切に勧めて呉れるのは、友の母君である。

自分と友とは、洋燈の皎々と照つてゐる座敷の八疊で、久々振り、火鉢を片へに、飯台を中央に置いての差向ひで、晚餐前の小酒宴を爲て居るので。併し双方とも、餘り盃とは交際の出来ぬ方で、如何かすると巻煙草の煙が上がり、話に身が入て來るのである。

「病氣保養の爲め休學すると云つても、君の病氣は例の『山水病』だらうが。フ、フ、」と笑のが友の癖である。

「先あ當らずといへども遠からずだね。然し今度といふ今度こそ、人間の身体の、案外に脆いつてとを悟つたよ。」と云ふのは、是迄格別健康に注意して居なかつた、自分の眞實の懺悔話。

「イヤ君の如き健談家には、胃病なんて、由來喰附つて無しだらふよ。」と飽くまで口の悪いのが此人の特性、其癖非常に人間は誠實なので。

『七』

話頭は次第に進んで、自分が今回休學せなければならぬやうに爲つた、原因の詳細な説明から、杳城下の現況を話すと、友は五高を卒業して以來の、略とした經歷を物語る。

「斯う爲つて面白くもない田舎に、縦令病氣だからつて、静と引込んでるのも餘り氣の利いた方
無いよ。一層のこと、東京にでも飛び出したらばど、思ふことは思つても見るのだが、其處がそれ、
家内無人の情けない仕誼さ、加之母などが、泣いて止めるものだから、イヤ實に僕も往生して丁う
からねね。」と父親の亡い友には、實に一理ある述懐である。

「然し僕も歸つたら、君と全境遇に陥るのぢやあいか。」

「眞個だよ。先あ君歸つて見給へ、秋の田舎は、詩的だの、何んの蚊のど、虫の好いことを吐して
る奴もあるが、其裡に静と主人公となること、一月と經ぬうちに。君でも亦必然、直ぐ飛び出した
くなるからねね。」など、酒は其處除けで、頻りに話に身が入つて居ると、不意に間の襖が外から開
いて、『兄さん』と飛んで來たのが、友の唯一人の令弟道夫の君。

『いよう此煙は甚麼だ！』と言ふに、初めて氣の附いた二人、四邊を見回はずと、眞に今まで談話
の肴に、絶えず燻らした兩人の巻煙草の煙が、立て切つてあつたこの八疊一坏に、充滿て居るので
ある。

『兄さん彼の南豊が來てるよ。』道夫君の言ふに

『何南豊が來てる……』と友は少時考へて居たが、

『ア、ぢやこれを遣り。そして阿母さんにね、今朝のね残りの餅を遣つたら、甚麼だらうツて、左
様言つてお覽。』と懸て卓上に在つた朝鮮餅を、一片撮んで差出すと、受取つた令弟君は、嬉しさうに
其儘驅つて往つて了つた。

『君南豊つて誰？』自分が疑懸顔に問ねると。今火を點けたばかりの新らしい巻煙草を、一口吸つ

て、アーツと煙を輪に吹き、

「何乞兒だよ。」と友は自分の顔をぢりり眺めて、微笑みながら答へる。

「乞兒よ!」乞兒と聞いて、自分は今まで薩張忘れて居た、彼のろれ! 先程濱で遭つたあの。奇怪な乞食少年のと思ひ浮べた。思ひ浮ぶると共に、胸が妙に躍つて来る。

「ぢや乞兒つて、十五六ばかりの少年ぢや無いかッ。」

「ウム!」と友は言つたが、自分の聲が餘りに頓狂染んで居たので、「フ、フ、」と吹出すと、次の室でも、友の母君が笑つて居らつしやる様子。

「君は彼の乞兒を知つてるのか。」友が尋ねるので、

「イヤ、何、識つて居るといふ仔細では無いが……。」と爰に先程自分が遭遇した出来事の、一件始終を物語る。「ウム」と、頻りに傾聴しながら、絶えず笑つて居た友は、自分の詞の了るのを待つて、

「フ、フ、ぢや其れなんだよ、今來つた奴は!。君渠は中々面白い奴だがね。」と友は自分が竊かに探ねたいと思つて居た、渠南豊なる者の略歴を、次の如く語り出した。

八

友の話に依ると、渠を『南豊』と呼ぶのは、人が渠の生國を尋ねると、何時でも『南豊!』と答へるからである。而して南豊とは、何處の國を指すのだから、能くは不明らぬが、多分豊後だらうと、或老人の物識が考へ出したとのこと。併し別に渠に尋ねたつて、詳しい事は何にも不明らない。或は渠自身、知つてゐないのかも知れない。勿論村だの郡だの尋ねたつて、唯黙つて澄し込んでゐる斗

りぞ。」で、此二三年の間、あア爲つて此近所から、門司邊を彷徨さまよいてれるのであるが。渠の面白いのは、物を貰うからと云つて、人の門に立つても、決して「下さい」とか、「た呉れ」とかいふことを言はない、黙つて茫然立つてるので、打棄つて置くと、暫らくして往つて了う。だけれど、大抵の人が、奇妙に渠には施して遣る。或ひは喜んで恵んでれる人も多い様子。渠は性質至極正直で、呆然ぼんやりしてゐる代りに、少しも悪戯を爲さない。其れで他の乞兒と異つて、自然人からも可愛がられ、憐まるものである。實に渠には、一点惡らしい處が無い。昵と其面貌を眺めてゐると、寧ろ哀れな様な、氣の毒な様な心持になつて來る。友はなほ詞をつゞくる。

ところが渠は、全く天性うまれつきの愚物ぼんやりでは無いらしいがね。能く視てると、其顔の裡に、何處とも知れず一種利發な、確實な点がほの見ゆるよ。殊に君も經驗した通り、渠が濱に立つて、海を眺めてゐる時などは、實に恐ろしい程、熱心なんだからね。と言つたが、巻煙草が燃え盡くしたので、更に復た新しいのを引出して、急がしく吸附る。ぢや最う昔から、海を視てゐんだね。と問ふと、

「イ、ヤ、僕も久しくゐなかつたので、詳しい以前の事は知らないのだが。人の話を聞くと、渠があア爲つて海を視るやうに爲つたのは、何でも此一年許りの内だと云ふね。——其以前も矢張視てつたのかも知れないが、全く人の氣に附かなかつたもんだらうよ。」と言つた友は、此時一段聲をはずませて來て、

それね君、渠があアやつて海を視るのには、何か仔細があるらしいよ。と云ふのは、人が渠に汝は獨身者か、阿父さんも、阿母さんも亡いのかと問ねると、必然きつて いんにや、父親も阿母も俺に

や無へや。皆な海い往つち、死んぢもつたんだ！。といふだらう。ふれて考へて見ると、何でも渠の親は、漁夫か何かで、漁にでも往つて、暴風雨にでも出會して、溺死したのかも知れないね。と言ふ時、自分は何となく、胸の間の盛り來るを覺えた。

「ふれぢや、渠があアして海を視るのは、畢竟親を慕うといふ丁見だね！」

「左様、さうだらうと思ふのだがね。」と言ふ友の言葉が最後で、自分等は少時默然として了つた。

次の室に音の聞ぬぬは、友の母君も、令弟君も、最うな寝しなすつたのだらう。自分等の八疊には、猶ほ洋燈の光輝が皎々と照つて、巻煙草の白煙が、奇体な形で、彼方此方の隅に動いてゐる。今は錫鍋の代りに、しちりんしちりんに懸つてゐる鐵瓶の湯が、しゆうしゆうと可なり高い聲で煮立つてゐる。——さても更け易きは漁村の秋の夜なるかな。戸外は極めて寂然ひつそりしたもので、唯た岸邊を洗ふ波浪の音が、幽かにさらり／＼音信來るばかり。

忽ち關門の方で、漁笛の鋭い聲が、ヒューツと鳴つたかと思ふと、直ぐ休んで、今度は極く澄みわたつた追分の節が、長く、細く、西の波止場あたりに聞ゆる。如何なる風流漁夫の口咏みにか。

自分と共に、考へ込んでゐた友は、此時偶然頭を舉げて、

「先ア君一盃飲らないか。漁村の夜半は、静かなもんだらう。稀にはこれも可いよ。だが妙な話に身が入つたもんだね。フ、フ、フ。」と例の富田君其儘である。

「最う眞平だ。」と言つて、朝鮮館を一片撮み、

「時に君何時だらう？」

「かうと、最う十一時半迄ねえ。」と言つた友も少からず驚いた様子。一時に少々晩くなつたが、飯を食さうかねえ。」と友は片へに在つた飯櫃を引寄する。

「ム、飯も可いが、随分最う取込んでよ。」

「なかに、日常の君にも似合はないぢや無いか。學寮内での出来事は、細大漏さず御存じの僕だ。何もさう今更、上品めくにも及ばんぞ。先あ久々振だ、腹でも充分拵へて、ねえ、今晚は一ツ愉快に語り明すとしやう。」

『九』

餘り夜更を爲たので、明る朝一朝と云つて可いやら一兎に角起き出たのが九時過ぎ、随分急いで、顔を洗つて、茶を喫して、朝餐をした、めた積りではあるが。最う直ぐ午時である。これでは餘り氣の毒なやうだ。兎に角一應散歩して來ようと、友を伴れ出して、門司見物と洒落れた。

先づ順路であるからといふので、甲宗八幡宮に詣で、次に海岸傳ひ、舊文字を通つて、城山の鼻に舞戻つて、一二軒、書店を漁つて見たが、好もしいものにも出會さない、さて所謂公園なるものをも拜見したが、甚麼も感心するわけに行かず、元來が狭い土地であるので、大概な場所は馳けづり廻つて、歸つたのであるが、まだ辛つと一時半である。而して心裡に残つて居るものは、唯だ狭い、煙つた忙はしい「門司」といふ市街の、漠然とした概念に過ぎない。

晝飯後は最う外出しない。新聞やら、雜誌やら讀んで、日暮れになると入浴し、洋燈點する頃かゝは、また餘り好もしからぬ例の酒宴だ。——好もしからぬと云つても、此物莫くんば、丈夫胸中

の磊塊、何に依つてか洩らすを得んで。兎に角饅頭、牡丹餅だけでは、思ふやうに氣煽(?)が騒か
れにくいものと見ゆる。

今宵は昨夜にも増して、心一層娛しく、談話も随ひて多くの活氣を帯んで居たので、つい飲み過
ごして、例の如く頭が重くなると、胸が又頻りにむかついて来る、殆んど座にも堪へられないやう
になつたので。

「オイ暫時失敬するぞ。」と言つて、今しも例の奇焰を吐き了つて、巻煙草に点火せんと爲た友を
見棄て、自分は不意と立上つた。

「何だ、まだ可いではないか。如何したと言んだ。」と止むる友の詞を障子越しに聞流し、素早く
庭下駄突掛け、其儘裏木戸引開くると、前面はすぐ海岸通りなので。

「十」

今宵は舊曆の幾日だらう。稍圓形の月が、頭の上に冴ひて居て、見わたす海峽満面の海山が、
其水のやうな冷光を浴びた風色は、誠に恍然となつた魂も、覺ゆす振ひ起つばかりである。殊に悪
魔のやうに、懼ろしく黒すんだ火の山と、城山とが、充分に鋭い霜氣を含んで、黙つて、白銀を流
した無限の海潮を吞吐して居る壯觀は、所謂サブライムの好模様であらう。

風は全く死んで居る。然し空氣が非常に冷たい。——むしろ凍つて居る様だ。

空の遠近には、星影が疎らに見ゆる。船が一隻も通つて居ない。唯だ波止場に繋つて居る夜泊の
和船に、地上の星かと思ふ紛がふばかり、燈火の紅いのが、一點明滅して知るゝのと。遙か前岸の燈
台近傍に、稍大きな和船が一隻、臙然睡つて居るばかり。今は岸邊を洗ふ波浪すら、殆んど何等の

音をも起てない、總てのものが、畏ろしい程沈靜の夢に耽つて居る、此海灣の月夜に對しては人は如何しても眞面目にならざるを得ない！。

醉の覺めてゆくけはひが、明らかに感ぜらるゝ——と、また頭腦がぞつくと、澄みわたつて行く様子。

自分は非常に心持が佳いので、小聲に詩などを吟じて、殆んど、無意識的に、粗末な石垣の海岸通りを歩いて居ると。脚下に寄り來る波の裏には、燐光の青白いのが、揉れては溶るけ、溶るけてはまた光るのが幽かに見ゆる。

時々はまだ、人家の那邊からか、人の話聲が響く。然し其聲は、宛然ら遠き他の世界から聞えて來るやうで、それが爲めに、我が眼前の此世界は、益々靜かになつて行く様である。」

不意に自分は歌聲を休めて、二三歩だちだちと逡巡つた、或者の影をすぐ、自分の眼前に認めて、ギョツとしたからである。——其は實に影であつた。影のやうな人間の立ち姿であつた。

『十一』

餘り大きからぬ松の木が一幹、石垣の狹間から生へ出で、海の上に差し掛つて居る其下が、一團の薄闇にあつて居る所に、悄然沖を眺めて、幽靈の如く、突立つて居る姿が、紛ふ方もなく渠南豊である！。

自分は駭くまいとか。今迄の醉は、茲に全く覺め切つて了つた。

此處は一寐どこだ？。直ぐ波止場ぢや無いか。船の人は最う寝て了つたのかしら。満船寂として、今前まで光つて居た燈火も、最う全く看ぬない。

舩を徐つと撫で居る波の色が、道理もなく白くて、冷たい幽靈の手のやうだ、と想ふと、其船が、また一種の柩の様にも想はるゝ。

自分は今、進むも嫌、退くも嫌といふ風で、少時は何を考ふるともなく、寂然と佇立んで了つた。眼は勿論南豊を凝視めた儘で。

天地は非常に静かだ。宛かも墳墓の内のやうに

倏ち向うの影は動いた。而して自分が此處に立つて居るといふことに、氣附いたらしく、ぢりり、此方を眺めやつた顔貌が、偶然稍を漏るゝ月光に照らされて、昨日とは異つて、非常に青白く、瘦せて居つた。其は實に幽靈—眞の幽靈の顔貌である！。

自分は覺せず、身の毛をよた、せて震ひ上つた。彼は最う死んで了つて、今其所に立つて居るのは、眞に渠南豊の幽靈ではあるまいかと疑つた。

其眼は、どんより曇つて居るが、又何處かに決然とした趣が看取。尙は無限の怨恨を、其濕つた睫毛の間に湛へて、竊かに或るものを憤つて居るらしくも思はれ。自分は曾て今までかゝる意味深い、情の籠つた、奇体な眼眸を見たことは無い！と、まで考へた。そして、其様考ゆると共に、自分が渠よりも先きに、哭きたくなつて來たのである。

嗟吁、是れ何等痛ましき相貌ぞ！家なく、村なく、國なき、天下の悲運な流浪人が、荒野に天を仰いで、萬斛の憤涙を漲らした時の相貌ではあるまいか。—樂みも、喜びも、希望も、光明も、はた未來も無い社會の落人が、たゞ前途に、死と、衰滅と、暗黒とを眺めた時の相貌ではあるまいか。

天地獨任の憐れな孤兒が、寥廓たる三界廣しといへども終に僅か五尺の渾身を容るゝの、一小區寰をも見出し得ないで、空しく千波重り、萬波疊まる冷やかなる大海の底に、同血同脈の温い懷を、戀ひ、慕ひ、索むる時の、其眞の相貌ではあるまいか！。

自分は爰に端なく、昨宵友と語つた時の、最後の詞を懷ひ出したので、極めて恐ろしい、悲しい、痛ましい考へに撲たれ、殆んど身も世もあらぬ、辛い思ひを爲たのである。

『十二』

南豊は良ふ久しく、自分を凝視つて居たが、何時の間にか、村の方へ消れて了つた。——實に自分が何とも知らぬ、深い傷ましい思ひに耽つて居た間に、影を掻き消す如く、消へて往つたのである。自分は今明らか白状するが、昨日自分が初めて南豊を見て以來、如何しても自分は渠を他の普通の乞兒と、同一視することが出来なかつたのだ。渠は實に他の多くの乞兒のやうに、這の理在の世を歩いて居る者では無い、正しく或他の異つた奇跡な世、——其は墓場のやうに淋しい、海の底のやうに冷たい、暗い處を歩いて居るのである。自分は渠の遠からぬ未來に、渠に取りては寧ろ嬉しい——併し世の人に取りては、寧ろ極めて意外な或出來事が必然起るであらうと信ずる！。

渠今年齡正に幾千ぞ。其搖籃には、幸が多かつたであらうか。生れて幾歳か、果して父と喚び、母と甘ゆることが出来たらう。人生未だ雷の時代にして、蚤く既に酷たらしい浮世の風雪に、さいなまれ、立派な天質を、生れもつかぬ不具とし。未だ社會に入らざる前に、既に社會から離れ。生人の世の樂み、喜び、嬉しみといふことを知らず、長へに關より關へ旅行する、渠南豊の運命こそ、實に悲惨の極と云はねばならぬ。

自分は幸心に、此等の事を考へて居るうちに、はとく我が人の世も、今眼前に開けて居る、此世界のやうに、左様冷やかで、無慈悲で、幸の薄いものだと思つた。

波浪は以前の儘に、静かに舩から、石垣の波止と洗つて居る。宛然ら自分のこの深い考慮を、亂すまいと注意して居るかの如く。

折しも關門の方に、またどうも昨宵の如く、小蒸氣の笛が響く。それが今夜は、極めて細く、長く、海山の此面彼面に、弱い共鳴りを興して聞ゆるので、自分の身軀と精神とは、此音に引き込まれて、次第々々に、大空の、那邊かの隅の果に、消え失する心地。

偶然沖を顧ると、今前田の燈臺のあたりを、下り汽船が一隻、徐々關門の方へ進んで居る。其前橋頭に架つて居る紅い燈火が、宛然ら活きた或魂魄が、飛んで往くかの様。

月も大分傾いた。富田はム麼して居るかしら。最う睡て居りは爲ないだらうか。飄然歸路に向ふと、今迄觀なかつた、廻か東方の、部崎の大燈臺近傍から、長防の山巒にかけて、白い美はしい夜霧が、海上一面に棚曳いて居る。

俄然脚下の石垣に、波の打寄する音チャブ〜。ウム、これが彼の汽船の通つた餘波であるか。吐きながら振返ると、其途端、船は明神ヶ鼻と廻つて隠れて了つたが、跡に残された一聲長い、けたましい鉄笛が、海峽一面の冷たい霜氣を一震ひ震はした。

【十三】

自分が田の浦に来て、最うけふで三日である。今日はム麼あつても歸らねばならぬ。然し汽船の出たのは、夕方の六時と云ふので、便船も幸ひあるし、朝餐が濟ひと、友と令弟君と三人伴れ、部崎

の燈臺に往つた。此所の燈臺長は、友の叔父君にあたる人と懸念件であると云ふところから、吾等は其紹介状を差出すと、心よく引接し、早速親切な部員に命じて、一同を燈臺内に嚮導せしめ、非常に叮嚀な説明を與へて呉れた。」

歸路は海濱から、山にかゝつて一里許り。歸宅したのが午後の一時頃、さて暫時新聞などを讀んで居たが、兎に角暮れぬ間に、門司迄出て居ようと思つたので、友と、令弟君と、加之母君と三人掛りで、非常に自分を止めて呉れたのではあるが、復の逢瀬を樂みに、無情く、——然し幾分戀々として、——別に荷物はなし、身躰一貫、飄然として立出ると、友も村外迄見送らうといふので、さうばと一緒に伴立つた。

此間にも、自分は南豊のことが忘られないので、友と其事ばかり話して歩いて居たが。今日は如何七なのやら、終に其影をだに認る事が出来なかつた。

「昨日の濱邊に来て、少時足を留め、巻煙草燻らしつゝ、舊知、——實に「頗る新しい舊知」ではあるが、其れが自分には、十年、百年、殆んど劫初以來の舊知のやうに思はるゝ、此瀬戸の山海を低回顧望して立つた。

併し、遂に彼の可愛い、可憐な、影の様な、幽靈のやうな姿を認る事が出来なかつた。否——自分か思つた——或は盡未來、彼の姿を認るの日は、終に自分には再び廻つて來まいと——

峠を越すと、忙はしい、騒いだ、亂雜な煙つた市街は、直ぐ眼前だ。自分は少時の間、脚は此騒動の裡を踏みながら、心は依然、田の浦わたりの、彼の靜かな美はしい海岸に逍遙つて居る事を感じた。

日暮れて、六時半といふに、我が搭れる小蒸氣第一宇和島丸は、門司の埠頭を離れた。街衢が水の裏に在るのやら、水が街衢の裏に在るのやら、月と星とは、空にも光つて居るが、また地上にも澤山光つて居るやうな、奇怪な關門の夜の絶觀が、次第々々に遠く漠然して來ると、忽ち最後の告別の鉄笛が頭上に聲高く響く。——今船は、明神ヶ鼻を廻つて居るのである。——と思ふと、聽てまた田の浦一帶の海岸が、夢のやうに右舷の方へ見えて來る。」

自分は露降る甲板の、人の居ぬ寂しい處に、孤獨つゞねんと佇立んで居たが、彼の濱邊、——あの朦朧りした波止場のあたりを、配と凝視めてゐると、今宵も亦影のやうな、彼の乞兒が、悄然突立つてゐるらしく想はるので、何となく復た悲しくなつて來たのである。

あゝ實に自分は今、夢を見てゐるのでは無いか看ねもしない人影を、憎ない妄想の闇の中に、書き出してゐるのでは無からうか、或は自分が今一意悲しがつてゐる其人は、却て喜んで海を視てゐるは。自分ばかり、獨りで、氣儘勝手に、哭いたり、哀れがつたりしてゐるのではあるまいか。などあられもない妄想は、妄想を生んで、次から次へと、想像の長い細路を辿つて往くうち、遂に全く何物も、見ぬ、聞ぬ、混沌世界に沈み入つて了うと思ふ途端、ギョツとして眼が醒めた。——其時を報らす階下の鈴聲が、今チン／＼と鳴つたのである。

機關の音が、大分高くひびいて居る。面を掠むる空氣が、非常に冷たい。

アレ／＼流星が！。東の空にきらりツと、白い細い、稻妻のやうなのが光る。

自分は悄然船室に降りて往つた。

『十五』

故郷に歸りて、一週日經つか經たないうちに、富田の所から一封の信書が届いた、先日御來訪の節は、薩張り無愛憎などで誠に失禮したということ、君は歸りて如何な感懷を興して居るか、僕は未だ充分歡樂を尽し得ないうちに、君から遁げられて了つて、今は非常に淋しく感して居るといふ怨言。それから該即も、一寸言つて置いたが、兎に角近々、是非東上する考へだなど、縷々記述して、さて最後に、次のやうな文言がある。

「尙は特に君が爲めに、通知せざる可らざる一事件有之、其は彼の南豊のことに候、一昨朝濱の漁夫何某、波止に繋ぎ置ける、其所有漁船を盗まれしどかにて、一村俄かに騒ぎ出し、所々方々、人手を分けて搜索仕候處、舟は明神ヶ鼻に近き岩蔭に漂ひ着き居るを發見し、早速漕ぎ返り申候ひしが。抑も何人が、這る悪戯を演せしものか。マサカ盗みたるものにて候はざる可く、さりて波止に確く繋留め置まつるものが、獨手に漂ひ出づる道理も無之。これは必定、何人の漕ぎ出で、其儘無法にも、打棄やりたるものならんと、議論は略一決したる姿に御座候へども、素より此濱内に、斯る亂暴を爲す者のあるべき筈なき、如何にも不思議至極と、罵居候ひし處。其夕方に至りて、誰云ふとなく、南豊が居ぬやうだと評判し來り、慥に昨夜迄は居たのだが、と一人が云へば、イヤ全く自分は、昨宵晚く波止で、彼の茫然立つて居る處を賭たなど証據擧ぐる者も有之。旁々遂に舟盜人は、彼南豊と決定仕りたる次第。然し南豊が、舟に乗りて、さて那邊に往きしが、其邊はなほ一疑問に御座候。或は入水したのではあるまいかと疑ひ。又或ひは、何のあの恩物ぼんぶつが、其様な大膽なと仕出かし得るものかと打消し。イヤ恩物ぼんぶつをたつて、氣が狂つて、海に墮おつた

のたゞ知れぬ。なき議論は人に依りて、區々に候。就ては肝心の死骸も、未だ發見致されず候へども、小生は、君の御話を有之、旁々大に思當る節も他に候へば、他分入水したものと、竊かば母などとも、憐れがり居る次第に候。兎に角不憫などを爲たものにて、人生の悲劇、寧ろ之に過ぐるものあらじと存申候。云々。

自分は書を掩うて哭いた。——そして言つた、災厄を喜び、嫉妬深く無情無慈悲なる運命の神は、終に渠南豊をして、其到達する處まで到達せしめた！と。

果然、渠は他の乞食と其選を異にして居た。

自分は今でもなほ眼の前に、瞭然と渠影のやうな幽靈の様な、悄然りした姿を認る。——或は未來永劫、此姿は自分の胸の鏡より離れ去らぬものであらう！

あゝ火の山の麓、明神ヶ鼻の畔、夜毎月明に咽ぶ一帶の潮風は、長へに自分の心を傷ましむるものと爲つた。

他日若し時あつて、自分が此海峡を過ぐるとがあるならば、七百年の疇昔、悲惨の最後を此處に演出した、平家一族の水魂を吊ふ以外にまた彼の薄命な、小さい、乞兒の靈魂をも、必定慰めて遣るのを忘れぬであらう！

(完)

